

【福島大学むらの大学アーカイブ 2】【川内 Chapter 2】

第三セクターだからこそ感じた川内村の変化

猪狩幸夫さん



インタビュー日時：2023年10月18日

インタビュー場所：川内村米備蓄倉庫

聞き手：安部聡希、倉田祐志、鈴木加穂、細田真矢、千葉偉才也

プロフィール

1950（昭和25）年、川内村生まれ（インタビュー時73歳）。川内中学校を卒業後、広野町にあった県立の練習農場で1年間学ぶ。その後16歳で川内村の農業協同組合に就職し、55歳まで39年間にわたり農協に勤める。55歳で株式会社あぶくま川内に就職し、「かわうちの湯」「いわなの郷」を運営するが、2011（平成23）年の東日本大震災により同年3月に解雇される。同年11月に同会社に再雇用され、2020（令和2）年まで勤める。その後現在まで農業を営みながら季節労働者として働く。

1. 猪狩さんのこれまでと農協を退職後の活動について

—まずプロフィールの部分をお伺いします。年齢、生まれた年、出身、職業、家族構成など、少しご教授いただけますでしょうか。

猪狩：分かりました。じゃあ、年齢から申し上げたいと思います。1950年、昭和25年生まれです。1月11日なんで、今度の1月11日が来ると74歳です、なります。昭和という、いま何歳ってなかなかたぶん皆さん、昭和っていうと、自分でも「何歳？」って、昭和生まれって言われても、もう昭和何年ってのが分かんないんでね。出身も、出身とか生まれたの、生まれも育ちも川内村です。この川内村から出たというのは、実は、川内中学校を卒業して、広野町にある福島県の県立の練習農場ってのがあったんです。たぶんみなさん分かんないと思うんですが、練習農場っていったって農業をやる人だけが、やる人だけっていうか、農業やる人が行く学校だったんですね。ちょっと余計なことしゃべりますけれども（笑）。

—どうぞ。

猪狩：自分は本当は高校に行きたかったんですけども、ちょっとうちが貧乏で、おめえは高校にやらないというふうにおやじから言われまして。練習農場って1年なんですよ。で、広野、それから矢吹、会津に県立の練習農場っていうのが。そこに1年間だけ行ってきました。もちろん全寮制なんで。今は練習農場ってないんですよ。たぶんあんまり知らないと思います。それで、1年間だけそこで、全寮制で、現場をやりながら。あれは、まあもちろん座学もありましたけれども、もう大体があれですね、現場。その1年間だけが、川内から離れた1年間です。あとはもう川内に帰ってきて、次の、その年、16歳から、農協、農業協同組合、川内にもありましたので。その頃町村ごとに農業協同組合っていうのがあったんだよね。いわゆる農協ですね。今は「JA」という呼び名で言っていますが、農協に勤めました。農協に勤めたのが昭和41年かな。16足すと、そうだね。昭和41年に農協に入りまして、そこから55歳まで、平成17年まで農協いた。39年かな、農協に勤めました。

39年農協に勤めて、川内村にかわうちの湯、それから、いわなの郷というのがありまして、実はそこ、村営でやってたんですね。でも、村営だとなかなか大変なんで、民間に委託をしようというふうなことで、実は役場のほうから、川内村商工会が主体的になって、指定管理者というふうな団体をつくりまして。それが、商工会が主体的になって指定管理団体をつくったんです。株式会社あぶくま川内という会社を立ち上げて、その会社がかわうちの湯とか、それから、いわなの郷の運営をするんですね。そこにどうだいという風なことで、実は55歳のときに、そこに就職をしました。

それで、2011年の、平成23年ですか、の東日本大震災のときに川内も全村避難になったんですが、全員解雇というふうなことで、この先どうなるかは会社も分からないんで一応全て解雇するよというふうなことで、一応平成23年の3月に会社を辞めさせられた。それで、川内は、大したこともなかったんで、今の商工会会長、井出茂なんですけどその人がその時に社長だったんですね。大したこともないんで帰ってこいと、23年の5月のときに、帰ってこいというふうなことで。実は川内村も富岡とか大熊の人が避難をしましたので、その片付け、整理をするのに帰ってこいというふうなことで、元の社員とか川内にいた人を集めて。その時はあぶくま川内じゃなかったですが、商工会が主体になって仕事しました。平成23年の11月だったと思いますけども、また、かわうちの湯とかいわなの郷を再開しましたので、それでまたそ

の当時勤めていた人を呼び戻して、川内に呼び戻して再雇用というふうな形で、令和 2 年まで勤めてたものですから、あぶくま川内では通算で、一時解雇はありましたけれども 17 年間勤めまして、退社をしまして、今は農業をやりながら季節労働者やっています（笑）。

家族構成なんですけど、まだおふくろが生きていまして、おふくろが今 96 歳ですか。96 歳で、ちょっと体とか頭のほうでそういう病気なもんですから、ちょっと施設に入ってます。それから、おふくろがいて私たち夫婦がいて、子ども 2 人いますが、どちらも結婚して、今は埼玉と、男の子は川内です。

2. 震災、原発事故からこれまで

—先ほど仰られた部分とかぶるかもしれないんですが、震災、原発事故以前は、幸夫さんは川内村内でどのような暮らしをしていたんでしょうか。

猪狩：どのような暮らしというか、あぶくま川内の現場の責任者を一応やってましたので、それなりのいい生活というか。特に困ったというふうなことはなかったです。

—震災と原発事故についてなんですけれども、2011 年の 3 月 11 日の震災当日はどちらにおられましたか。

猪狩：あの、実は私、尿管結石という持病を持ってまして、たまたまそのときには、その診察で、南東北総合病院に行ってたんですね。たまたま郡山にいて、3 月の 11 日だったもんですから、3 月 14 日がホワイトデーだったんですね。2 月 14 日にいろいろもらった人にホワイトデーにお返しするものを郡山のデパートで買い物してました。その時にちょうど地震が来たんですね。

—なるほど。ありがとうございます。続いて、震災、原発事故当時のお話を差し支えない範囲で聞かせていただきたいんですけど、避難とかは、11 日当日は郡山にいらっしゃったってことだと思うんですけど、その後とかの……。

猪狩：11 日に郡山でいわゆる地震が発生して、ラジオを聞いたら、とにかくもう津波で避難してください、津波で避難してくださいっていう放送しかなかったんですね、私もちょっと気分が悪くなって、ちょっと嫌な感じがしたもんですからもう郡山から真っすぐにすぐ帰ってきたんですが、よく帰れたなと思うくらい被害はなかったですね。かわうちの湯の現場の責任者もやってたもんですから、かわうちの湯に回って実態を見たら、もうとても営業できるような状態でなかった。色んなものが崩れて。それでその日は真っすぐ、かわうちの湯に回って、うちに帰ってきました。川内、停電にはならなかったんですよ。これも蛇足ですけども、川内には発電所があるんです。水力発電所なんですけど、その発電所があるおかげで川内は停電にはならなかったんです。たぶん広野あたりは停電になったんじゃないかな。

—そうです。たぶん地震発生 2 日後ぐらいに、たぶん停電に一回なったと思います。

猪狩：なったでしょ。川内は停電っていうのはあんまりない。自分、まあ自前でっていうことはないですけども、東北電力の発電所持ってるんですから。もちろんテレビも見れたんですが、その日の夜、テレビを見ながらいたら、実はうちの息子から、「第 1 原発の 5 キロ以内は避難指示ができるよ」って。うち

の息子の嫁さんが富岡の夜の森だったんですね。夜の森に下宿してましたんで、とにかく 5 キロ以内は避難をしろというふうな指示が出るよというふうな話を聞いたんですね。そんなに原発大変なのかなというふうな思いで、その晩はうちで寝ました。寝たっていうか、うちに泊まっていうか、うちで寝て、次の日、会社、かわうちの湯に来たらば、会長が「かわうちの湯は避難所になる」というふうな話で。「どういう避難所なんですか」つつつたら、「実は富岡、大熊はじめ、原発がおかしいんで避難をしてくるんだ。そのための、かわうちは避難所になるよ」というふうなことで、どんどん富岡、大熊の方から避難をして、かわうちの湯はじめ、小学校の体育館とか村の体育館とか、あるいは集会場、そういうところが避難所になったんです。私も、もちろんかわうちの湯の責任者だったもんですから、これは大変だなというふうなことで、実はその日にこの辺へヘリコプター飛んで、20 キロ圏内は避難をなさいというふうな指示が出てたんですよ。それで、かわうちの湯とか、ほかに、いわたの郷も富岡の人がどんどん入ってきますから、私もうちに帰れなかった。15 日まで富岡の人と一緒にかわうちにいて、寝たりっていう。もちろん仕事もしてましたけれども。

—15 日まで川内村のほうにいらっしゃったっていうお話だったんですけども、その後、幸夫さん自身が避難所や仮設住宅などで暮らされた経験はありました。

猪狩：15 日の日に村長から、いわゆる全村避難だというふうな指示が出たものですから。実は私の家が 20 キロ圏内なんですよ。ちょっと富岡寄りなもんですからもう家には帰れないというふうなことで。そうしたら、うちももうとにかく避難をしようっていうことで、16 日の日に茨城のほうに避難をしたんです。それで、その他かわうちの湯っていうか、あぶくま川内の人たちは、郡山のビッグパレットとかそれぞれの所に従業員は避難をしました。私は最初、茨城に避難をして、茨城から今度、埼玉に娘いるもんですから、娘のところに行って、そこで 1 カ月暮らしたの。

—そのあとはどうされたのでしょうか。

猪狩：会長に、5 月になったら帰ってこいというふうに言われまして、とにかく川内で仕事をするんだから帰ってこいっていうふうに言われたんですよ。川内に帰ってこいって言われても、うちには入れないんですよ。ですから、とりあえず郡山にうちを借りて、郡山から通いました、川内まで。

—郡山で賃貸を借りたというのは幸夫さんだけですか。それともご家族も一緒に？

猪狩：うちの息子は役場の職員だったもんですから、自分らでそういう下宿、アパートを見つけて、それぞれ借りていました。それでうちのおふくろは横浜に私の姉がいるもんですから、そこに来たんです。それで、そのうち姉のところにも入れないんで、うちのおふくろは泉崎に来たのかな。泉崎に来て、ビッグパレットの所に来まして、そこでたぶん 3、4 年いたと思います。私は郡山から遠いもんですから、小野町にうちを見つけて、小野町から川内の仕事場に通ってました。

3. 川内村での暮らしの変化

—それでは、震災、原発事故からこれまでのことについてお聞きします。震災、原発事故以降から最近のこと、お住まいやお仕事、最近なされている活動についてお聞きします。

猪狩：震災前の仕事の苦労とか震災後の仕事の苦労っていうのは、よく分かんないんですよ。仕事は好きなほうなんで、震災前もとにかく仕事をして震災後もかわうちの湯と、復興のためにやろうっていうことでやりましたんで、仕事の苦労ってあんまり、震災前の苦労と震災後の苦労ってそんな変わらないですね。つらいついていうのはあんまりないですね。

—暮らしの部分で言うと、震災前から震災後の暮らしの変化は、やっぱり多かれ少なかれありましたよね。

猪狩：あまり感じないなあ。結局仕事してればいいんで。

—仕事の変化も、もちろん富岡の人たちが来て、受け入れて、自分たちの避難をしてというところの一時的な苦労とか日常的な活動ではないものが当時はあったかもしれない。その後っていうのはある程度、仕事の苦労っていうのはどうですか。

猪狩：同じ。たぶんこのあぶくま川内とかの、いわゆる町づくり会社みたいなお仕事だからっていうのもあるかもしれないですね。苦労っていえば、かわうちの湯に来てくれるお客さまが減っちゃった、だから、会社をどうしようっていう心配はすごかったですね。資金がないんでどうしようっていうと夜も眠れないっていう苦労はありました。だけど逆に、まあこんな話しちゃ悪いんですけども、東電の賠償ありますよね。そういう賠償を東電に言えばある程度賠償金もらえたから。だから、一時は資金をどうしよう、お客さま少なくなっただけでどうしようっていう、そういう心配事ありましたけど逆にその賠償金もらって少し気が楽になったかな。だから、苦労っていう苦労はあんまり感じなかったですね。

—震災以降で、仕事を再開しながら、印象的だったことはありますか。

猪狩：とにかく会長と2人で川内村の復興のため、双葉郡の復興のためにやろうっていうその思いだけでやってきたもんですから、あまりそういうのも感じなかったですね。とにかく一生懸命やろうと。でも、やっぱり遅々として進まなかったのはありますね。

—進まなかったというのは、復興ということですか？

猪狩：うん。逆に川内は早く帰還したためにいま置き去りにされているような気がするんです。毎日、新聞なんか見ると双葉、浪江、富岡とかそういう所がどんどん色んな予算が付いて、箱物であれ何であれできていくと、川内って置き去りにされてるかなっていう。そんな心配事は今ありますね。

—どうしても、早く戻ったから大丈夫と考える人も多いかもしいけないということですね。

猪狩：そうですね。今まで、帰還困難であれ何であれ、やっぱり手が入らなかつたところが今になって集中して入るようになったので。例えば昨日の新聞かな、浪江にモールができるとかイオンができるとか。だから、そういう話題性はものすごくいま、双葉町とか大熊町、浪江町にもありますね。川内は話題から取り残されたというそんな感じがしないでもないですね。

—幸夫さんから見て、川内の暮らしは、幸夫さんご自身だけに限らず震災前から震災後、この12年で変化はありましたか。

猪狩：変化というよりか、やっぱり若い人が少なくなったな。震災で避難をして子どもと一緒に避難をして、その子どもが別な学校に転校をして、そのままいく。で、高校はもちろん川内にないんで、そのまま、もう郡山とかそういう所に行ったまま帰ってこないっていう人が多い。ですから、若い人が少ないっていう、そういうのはありますよね。

—震災前はやっぱりある程度、まあ高校もありますしね。

猪狩：そうですね。分校とはいえども、川内、高校ありましたんで。

4. 第三セクターだからできたこと

—猪狩さんは第三セクターをされているということで、第三セクターだからこそ川内村のためにできたことが何かあれば教えていただきたいです。

猪狩：果たして自分のやったことが川内村のためになったのか、ならないのかわからないですね。実は、3年前に辞めるきっかけになったのが、川内に今ホテルがあるのですが、川内に震災後に造ったホテルもあぶくま川内で経営していたんです。つくった当時は、あぶくま川内の本当にドル箱というか、あそこが一番収入がありました。ですが、そういう復興事業がだんだんなくなるにつれお客さまが少なくなってきて、あるいは、元からあった旅館が新しい旅館を作って、会長のとこなんかもそうですけども、お客さまがいるだろうということで多分造ったのだろうけども、川内村の震災後造ったホテルがあるおかげで、そこにお客さまが行かなくなりました。だから、そういう川内の人との軋轢というか、そういう複雑な思いはやっぱりありましたね。それも少しどうしようかな、このままやっていったらまずいっていう。

—それは、すぐに評価ってのも難しいですよ。時間の中で、あの時どうだったのだろうみたいなことが。

猪狩：そうそう。

—あぶくま川内は、だから、町づくり会社というか、第三セクターとして、結構震災前もいろいろなことを積極的に行っていたのですか。

猪狩：そうです。

—震災後はさらに、ホテルの運営とかも含めて規模が拡大していったのですか。

猪狩：そうです。あと、直売所も実は違う会社がやっているのですがもう運営できないというので、それだったら、あぶくま川内で運営してくれないかっていうふうになりました。直売所もやったのですが、なかなか直売所は大変ですね。

—あそこの直売所は、村民の方々がそれぞれ自分のとこで作ったものを持ち込んで売れるってことですか。

猪狩：そう。やっぱり震災後、震災後ということじゃないのでしょうか、今は農業も昔は川内はそれぞれ個人で農業をやっている、今は大きくなっちゃって、団体を作って、組合みたいなものを作って、そこが田んぼからいわゆる農業をやるんです。そうすると自家用野菜っていうのが少なくなってくるんですね。やっぱり個人でやってると、自家用野菜を作って、余ったものを直売所に出すっていうようなのが結構いい形になるのですが、それが少なくなる。だから、震災前より震災後は農業も大型化はしてきたけどもそういう部分で、個人個人の農家がというのが少なくなってきましたね。作って出荷をするという形のもの少なくなってきました。

5. 震災後、かわうちの湯が役場よりも早く再開できた理由

—先ほども少しお話に出ていたと思うのですが、震災のあとに、かわうちの湯が役場よりも早く再開できた理由があれば教えていただきたいです。

猪狩：あの、かわうちの湯が再開した時に、まだ川内村役場は郡山のビッグパレットにあったんですね。で、くどいようですが、会長といろいろと相談をしました。あるいは、川内が全村避難した中で、もちろん富岡警察署も川内にあったのですがもう富岡にいれなかったの。警察署の対策本部も実は川内に置いたのですが、もう警察は福島に移転をしまして。一つ消防だけが避難をしなかったんです。川内のコミセンに宿泊をしながら、ですから、第1原発、あそこに行ったのも双葉、本部なんですね。消防署なんですよ。東京消防庁がかなりクローズアップされましたけれども、実際は双葉町消防がいろいろなことをやっていたんです。そういうこともあって川内に本部を置いて、で、その人たちが、もう風呂も入れない。だったら、かわうちの湯を早く再開をして、あるいは川内に帰ってきている人がいましたんで、そういう人に少しでも安心してもらおうということで8月にかわうちの湯を再開しました。まあいろいろありましたけども、結局、8月に無料でかわうちの湯をやろうと、それが復興を進めるための一つの助けになるんじゃないかなという風なことで、一応8月に無料でかわうちの湯、ただし日中だけということで、8月に。そのときは、あぶくま川内ということじゃなくて、村の了解を得ながら、かわうちの湯を再開しました。

—再開したら結構いろいろな人たちが来たんじゃないんですか。

猪狩：そうでもなかったですね。消防の人は喜んでました。あと、川内に帰ってきた人もいるし、避難しなかった人もいたんですよ。で、11月に、じゃあ改めて従業員を呼び戻して、それからまた、あぶくま川内としての、会社として立ち上げることができました。

—猪狩さんはさまざまな事業をされていると思います。そうした事業を展開していく中で、川内村の人々や川内村がどのように変化していったのか教えてください。

猪狩：..うーん、川内ねえ、なかなか川内ってあまり変化しない。さっきもちょっと話しましたがけれども、

一つは、農業が個人経営から企業経営みたいな形になったっていうのが大きな原因、変化かな。あとは、いろいろな会社が川内に入ってきましたけども、今になるとやっぱり、やっぱり、かな、川内に工業団地造って、そこからいろいろな会社入ってきましたけども、一つの会社はもう工場を造っているうちに撤退をした、再開をしないで撤退をしたとか。あるいは、工場っていうか会社を始めたけども、もう5年たったら撤退をした。だから、さっきも言ったように、川内も置き去りにされたというわけじゃないんだけど、震災から13年、12年かな、たつて、ちょっと薄くなったかなっていう、イメージは薄くなったかなっていう。あとは、年寄りが多くなったっていうことですね。若い人がいないのに年寄りが多くなって。あとは、あまり変わらないんですよ。新しい仕事ができたとか、そういうこともないし。でも、こういう、この建物なんかは、これはたぶん震災のおかげですね。いろいろな補助金が出て、こういう建物、倉庫ですね、ができたと思います。

6. 社会の変化と変わらない川内

猪狩：復興という名にかけて、いろんなものが各町村、できてますよね。例えば高速道路のインターチェンジなんてのは各町村ごとにあるんですよ、双葉の。広野、檜葉、富岡、大熊、双葉、浪江と各町村にあるんですよ。それは、復興というふうなことで、政府っていうか国が「分かりました」ということで全部造るんです。だから、ある町村で、町村名は言われませんが、かなりのお金をかけてスポーツ施設を造ったけども、「将来どうするの？ それを維持できるの？」って。川内はまだ8割くらいの人が帰ってきてますから、ある程度の力はあると思うんですが、将来的には相当少なくなると思いますけどね、人口も。広野はそうでもないな。広野は結構.....。

—そうですね。結構にぎわってるといえば、にぎわってますし。例えば、ふたば未来学園高校から、いわき市から人が来たりとかもして、だいぶ人は多いんで、繁盛してます。

猪狩：だから、そういうところがやっぱり違うよね。

あとは、震災後と震災前で変わったことってあまりないな。こういう道路はかなりよくなっています。ハード面はやっぱりよくなっています。まあハード面も大事だけど、やっぱりソフト面かな。

—これ、そういう意味では、浜通りの中で沿岸部の自治体に関しては産業自体が壊れてる場合があるじゃないですか。川内に関しては、震災、原発事故によって産業がなくなったとか、そういうのはありましたか？

猪狩：ないですね。さっき言ったように農業が大型化してきたいう、そういう部分は変わった部分ですね。あとは、川内村の産業っていう産業は、農業とかあとは林業。やっぱり林業はそんなには変わらないですね。林業もやっぱり大型化、大型化というより、もう会社が、個人じゃなくて、もう会社、組織にして、そういうところが林業をやっているっていうのが、やっぱりあり。だから、変わったのは、やっぱりそういう、農業にしても林業にしても、「こういう」っていうものはあまりないですね。川内にはそういうものはない。あるとすれば、あと建設業か。この三つくらいで川内が成り立っているものですから。建設業は結構やっぱり復興というふうな、助成金、それでかなり、まあ「潤った」という言い方はちょっと

語弊がありますけれども。

—必ずしもマイナスのものばかりではない？

猪狩：ないですね。一番大きいのは、さっき言ってた若い世代がいったん出てしまったことが一番大きいですね。あとは、川内村の問題ばかりじゃないんですけども結婚をしない独り者が多い。これは震災のせいじゃないと思うのですが。

—社会全体で？

猪狩：社会全体の問題だと。ですから、もうあと何十年かしたら本当にすごいことになると思いますよ、日本が。

—本当に、まあもちろん結婚とかそういうのも自由だから、何ともいえない難しさがあると思うんですけど。

猪狩：実は、震災前の、20年くらい前に川内村役場産業課に行って、「村で仲人を雇ってくんないかい」、頼んだんです。「ノルマを付けて、1年間に500万なら500万のサラリーを出して、仲人を雇ってくんない？」って頼んだんです。その頃から正直、私は心配だったんですよ。

—それ、いつ頃ですか。

猪狩：昭和の後半かな。でも、実現はしなかったです。それで、かわうちラボができて、寿一ちゃんに「ラボで仲人をつくねえかい？」って。で、一応名前はつくったんです。名前っていうか、そういう人は指定はしたんですが、なかなか、これは本当に難しい問題ですね。私はそれが川内村ならず日本全体の問題としてもものすごく心配なんですよ。

—幸夫さんの考える結婚のメリットとは何でしょうか。

猪狩：いわゆる野性味がなくなっちゃってるのかな、人間として。やっぱり野性味のあるような人は何をやってもいい（うまくいく）と思いますよ。女性なのかな、男性なのかなって分かんないっていう人も結構今いるんだよね。私もテレビなんか見えて「この人、男性？ 女性？」ってうちのに聞くんだけど、なんかいい意味でというよりも悪い意味で人間が平らになっちゃったっていうか、平均化した、しちゃったというか。もう少し、やっぱり男だったら野性味のあるような、そういう人のほうが俺はものすごく魅力があると思う。

—結婚していてよかったなっていうような思い出って何かありますか。

猪狩：やっぱり一番は孫ができたことで。

—お孫さん。子どもよりもお孫さんですか。

猪狩：やっぱり子どものかわいさと孫のかわいさってまた違うんですよ。だから、孫に出会えたっていうことは本当に。今、娘も2人、息子も2人子どもいるんですけど。だから、今こうやって74になるけども、74になって働いてても、やっぱり孫のために金を使いたいっていうか、そういうのはあるんですよ。

ね。

ーじゃ、今の日々の生きがいの一つとして、やっぱりお孫さんっていうのは大きいですか。

猪狩：大きいです。

ーお孫さんとは、でも、今、だから、息子さんのお孫さんは村内におられる？

猪狩：はい。

ー娘さんは埼玉ですか？

猪狩：そうです。

ー時々埼玉に遊びにいったりとか。

猪狩：あの一、実は、うちの孫も 22 かな、22 なんです。来春、大学卒業するんですよ。そうすると、行ってもね、面白くないみたいで（笑）。だから、もう二十歳っていうか、女性の場合はもう中学生になったら、じいちゃんばあちゃん、あんまり関係ないですね。小学校の高学年になると、もうじいちゃんいなくてもいいみたいな感じなんです。それでまた、いや、本人はそう思ってるんだけど、小さいうちは「じいちゃん、じいちゃん」って来るんですが、小学生高学年になるともう寄って付かないです。それは仕方がないことなんです。で、また、その 20 歳過ぎて、なるとまたちょっと近づいてくる。

ー女子的には少し、中学生ぐらいになってくると、おじいちゃんおばあちゃん、別にいいかなっていうふうになるっていう時期があるんですか。

女性一同：いや、あんまり。

猪狩：それと、やっぱり引きこもりが多いね、今の人って。なんでだろうなって。

ーまあ引きこもりもいろいろあるじゃないですか。単純に家の中が楽しいっていう人もいるし、もう社会と関係を切っちゃうって人もいれば、もっと外に出たほうがいいっていうふうに思ったりもしますね、たぶん。

猪狩：われわれの年代になると、親ももちろん相当、年取ってくるし、話をするのはやっぱり友達なんですよね。だから、友達だけはたくさんつくってほしいと思います。

ー幸夫さんの小学校、中学校のときの同級生ってのは結構今でも仲よく……。

猪狩：してます。

ー村内に（同級生は）結構残ってますか。

猪狩：残ってますね。私らの時代が一番多かったんですよ、同級生、川内で。

ー何人ぐらいおられました？

猪狩：川内で、私らのときで二百十何人いました。だから、その頃は川内も人口 6000 人くらいいたんじ

やないかな。

－それは小学校？

猪狩：いや、中学校。

－小学校、何個あったんでしたっけ、当時って。

猪狩：.小学校は3個ありましたね。第1、第2、第3小学校までありました。

－中学校は一つ？

猪狩：中学校は一つです。

－じゃあ、それだけいたら、やっぱ同級生とのつながりとかね。

猪狩：ありますね。ただ、中にはやっぱり同級生と話ししなくてもいい、付き合わなくてもいいっていう人もいますから。

－川内も比較的、次男坊以下は.....。

猪狩：いないですね。

－外に出たとか、そういう場所ですか。

猪狩：そうですね。

－じゃ、村内に残ってんのは、ある程度やっぱり長男とか。

猪狩：長男。

－じゃあ、同級生の中でも、まだつながり残ってんのは長男ってことが多いってことですか。

猪狩：そうですね。われわれの時代は、さっき高校の話出ましたけども、高校に行くのは大体半分くらいです。

－これからまだ「こんなことやってみたいな」と思うことがあれば教えてください。

猪狩：今はもう事業っていうか個人で事業やりたいっていうのはないですね。いま季節労働者でこういう仕事してますけれども、これをやってないときは農業と、それからシルバー人材センター、川内では「ゴールド人材センター」っていうんですが、(それらの)仕事をやってます。で、実はうちの娘の亭主が佐賀県なんですよ。で、佐賀に行ったときに伊万里に行ったことあるんですね。本当にきれいな町なんですよ。だから、ゴールド(人材センター)で川内の、できないですけども、川内をもっときれいにして、ああ、川内って本当にきれいなんだなって、(思える)そういうふうな所にしたいなっていう気持ちはありますけども、ちょっと無理ですね。できません(笑)。

－佐賀の伊万里はどういうところに惹かれましたか。

猪狩：本当に整理されてて、本当、ああ、きれいな町だなっていう。

ー景観が？

猪狩：景観が。

ー川内も町並みを整えたいって意味できれいにしたいってことですか。

猪狩：そうですね。それでもやっぱりこうやって見ると、結構（人が住んで）いないうちがあるんですよ。もう空き家が多いんですね。そうするとうちのまわりが相当荒れてまして。だから、そういうところからは結構草刈りとか頼まれるんですが、ゴールドで。そういうところをきれいにしておかないと本当に。ああ、川内って行ってもなんか嫌だなっていうふうな、思われるのは嫌ですから。

ーでも、根強い川内ファンって結構いますよね。

猪狩：そうですか。

ーわれわれ、この間マラソンの支援でもみんな入っていて、ずっと毎年走りにきてるみたいな人たちとかもいたりとか、すごい根強いファンがいる地域だなと感じます。

猪狩：こっから先生の後ろを見ると、あの山は大体何ていう山か分かると思うんですが。

ー滝根？

猪狩：大滝根。阿武隈山地では一番高い山なんですね。あそこの頂上には自衛隊のレーダーサイトあるっていうのは分かってますよね。だから、本当に「ああ、川内っていい所だな」って思えるような。この後ろに見えるうちなんかも、これ、「3 億円豪邸」って言われまして。でも、これ、中の木とか、そういう庭木なんかは手入れしてないんですよ。だから、こういうところが、だんだんひどくなっていくのかなって。

ー幸夫さんが考える復興や幸夫さんにとっての川内村の理想像があれば教えてください。

猪狩：やっぱり一番の理想は若い人が結婚することですよ。家庭を持つことが一番、村といい、どこの町村も活気が出てくることだと思う。だから、じゃあ、われわれで何ができかっていうと、なかなかできるものってないんだよな、本当。ちょっと自分自身も情けねえなとは思いますが。

ー幸夫さんにとって震災前から変わらない川内村の魅力は何ですか。

猪狩：うーん、難しいな。本当に難しいんですよ。川内を、例えば 10 年なら 10 年、5 年なら 5 年離れてると、川内村のいいところと悪いところ、ちゃんとたぶん見えてくると思うんだ。川内村の中にいると、果たしてどれがよくて、どれが悪いんだろうなんていうのがなかなか見えてこない。

ー自分はインタビューを通して、逆に変わらないことっていうのが魅力なんじゃないかなって思ったんです。逆に僕の町（広野町）は震災を経て、「新しいものをどんどんつくろう」だったりとか「いろんなもの取り入れよう」みたいなものがあるんですけど、それでも結局、震災前と比べたら違う町じゃないで

すか。でも、川内村は震災前とあまり変わらないっていうのは、その当時のままというか、同じ、文化としても残していけるっていうのは、川内村がそのまま残っているっていうのも魅力なのかなって僕は思いました。

猪狩：逆に変わらないって、変わりようがない、たぶん。そんな気がするな。だから、やっぱり少しずつ少しずつ、いいほうに変わればいいけども、変わる、そういう人材もないし、だんだんやっぱり高齢化も進んでいくし。そん中で、変わるのには本当に道路がよくなるくらいだな。あとは、空き家が多くなる、見た目も悪くなるっていう、そういうところかな。

ーこれからの日本を担う若者に対してメッセージがあればお願いします。

猪狩：うーん、もう少しあれだな、平均化、悪い平均化しないで、一人一人の個性をもっと強く出して、さっき言った、やっぱり野性味のあるような、(そういう)、一人一人特徴のあるような、そういう若者になってほしいな。悪い意味で均一化というか、そういうふうなのがあるな。「俺は俺だ」っていうのはあるんだろうけども、それは、やっぱりこういう(スマートフォンの)せいなのかな。七十なんぼになって、これ(スマートフォン)はいいようでよくないなって思うんだけども。もうちょっと活力のある、活気のあるっていうか、個人個人の特徴があるような若い人になってほしい、若い人が出てほしいな。

【学生の感想】

今回のインタビューを通して、川内村は私たちの最初の予想に反して震災による変化が少ないということを知りました。そして、その変化が少ないという現状はポジティブにもネガティブにも捉えられ、閉鎖的なコミュニティを変えていく必要があるという課題も浮き彫りになりました。また、幸夫さんの「野性味が足りない」という言葉が心に残りました。インパクトの強いこの言葉ですが、この言葉は若者の結婚率の低下や、個性が失われつつある最近の若者など様々な方面での課題として捉えることができ、看過できない言葉であると感じました。幸夫さんの思いやインタビューでの学びを念頭に置き、今後の学修に繋げていきたいと思えます。

行政政策学類 1年 安部聡希

実際に自分の目で見たり話を聞いたりする中で、当時の村民の葛藤や苦しみなど、ありのままの川内村を知ることができました。幸夫さんからは川内村への強い想いや被災してからの行動力を学びました。また、活動を通して、学んだことや感じたことを自分の中だけで終わらせるのではなく、このように記憶を形として残し、今の人たちや後世に伝えていくこと、つなげていくことの大切さを学びました。これらを目的として、万が一に備えて、また、発生してしまったときに、幸夫さんのように自分には何ができるのかを考え、行動を起こす姿勢を大切にしていきたいと思えます。

行政政策学類 1年 鈴木加穂

今回のフィールドワークを通じて、猪狩さんにお話をお聞きしたからこそ改めて理解した川内村の素敵な部分やこれからも続く復興に対するヒントなどを考え、学ぶことが出来ました。印象的だったのは、

「川内は早く帰還したために、いま置き去りにされているような気がする」という言葉です。今までは早い帰還に対する利点だけに注目していましたが、異なる視点からのお話を伺って、復興においては1つの視点だけではなく多角的な視点で捉えることが重要であることに気づきました。今後さまざまな角度から地域に関わるなかでこの気づきを大切にしたいと思いました。

行政政策学類 1年 細田真矢

自分の生まれ育った広野町より帰還が早く進められた川内村は課題が少ないと思っていましたが、今回のフィールドワークを通してその考え方は誤りだということが分かりました。帰還人数の少なさや地域コミュニティの回復など早期帰還ならではの課題が多くあり、震災は様々な「傷」を負わせるということが理解できました。また、「震災以前から変わっていない」のではなく「震災当時から停滞している」という捉え方をすると大きな変化をせずに復興を進めることが必ずしも良いことではないと感じました。

人間発達文化学類 1年 倉田祐志